

東北応援ツアー「A 岩手県コース」レポート

題名:現地を訪問して想うこと

氏名:元谷彰弘

卒業生 1996 年

卒業学部:法学部

今回の応援ツアーで一番印象に残ったことは、陸前高田市の市街地に台形の盛土が並ぶ風景でした。被災地ガイドによれば盛土の高さは 6~7m。これを土台として被災者向けの公営災害住宅を建設する計画との説明でした。今回津波被害にあった沿岸部の復興計画では住居は高台への移転が基本と聞きます。しかし権利関係が複雑で土地の区画整理、住居移転も進まないことをツアー1 目目に釜石市職員である校友のお話で知りました。災害からの復旧途上での一時的な仮住まいという位置付けですが、盛土の上の住居で果たして暮らしが成り立つのか。市街地がまるごとの消滅してしまうほどの大きな被害を受け、再び同じ地に住みたくない感情を持つ住民も多いのではないかと。また家賃などの心配から仮設から出るに出来ない住民もいるでしょう。とりわけ他に行く当ても財産もない人、年金のみで暮らすお年寄りや何らかの障害を抱えた人、が取り残されてしまう街、住宅になってしまわないか？バスの車窓から盛土を眺めながら様々なことが頭の中に浮かびました。

人の暮らしの再生、その基礎になるもの、住まいはもちろんですが、人と人とながたりや関係を持ち支えあうえる環境、行政としての生活支援等々、本当に住民が暮らし続けるために必要な要素を組み込んだ街の再生で「復興」から置いてけぼりにされる住民が生じないことを願うばかりです。